

## 〈論 文〉

## アイヌ語千歳方言における反復による有音休止

佐藤 知己

- 0 はじめに
- 1 休止とは
  - 1.1 日本語の休止
  - 1.2 英語の休止
- 2 アイヌ語の有音休止
  - 2.1 音声・音韻的特徴
  - 2.2 文法的特徴
- 3 まとめと今後の課題

## 参考文献

キーワード 有音休止、rの後の母音の有無、節の従属度

## 0 はじめに

日本語では、主として「言いよどみの切れ目」をふさぐ目的で、先行語の末尾の母音が反復されることがしばしばある(大石1969:104)。アイヌ語千歳方言の物語テキストにおいても、日本語同様、しばしば語の末尾部分の反復がこの目的のために用いられる<sup>(1)</sup>。しかしながら、この反復は、単に息継ぎや言いよどみを示すばかりでなく、アイヌ語の音声、文法の両面に互って興味ある示唆を与えるものであることが明らかとなったので以下に報告する。

## 1 休止とは

亀井他編(1996:282-283)によれば、休止とは発話の途切れを指し、息つぎに現れ、また、句読点のような役割を果たすものとして発話内に入れられるものを言う、とされる。休止には完全に無音の場合と、発話中の文の要素とは関係のないつなぎ言葉的な要素(「えー」「あー」など)の場合とがあり、前者を「無音休止(silent pause)」、後者を「有音休止(filled pause)」と言う、とする。以下ではアイヌ語の「有音休止」、特に語の末尾部分を反復するものについて考察する。その前に

我々にとって理解しやすい英語と日本語の休止に関する通説を簡単にまとめ、その上でアイヌ語の事例を見ることにしたい。

### 1.1 日本語の休止

川上(1961:71)は、日本語を例として「言葉の切れ目」を論じているが、結論として、「言葉の切れ目」の本質は息の切れ目ではなく、音調である、と述べている。たとえ息の切れ目がなく、続けて発音されても、音調によってそこに「言葉の切れ目」のあることがわかるからである。これに対し、大石(1969:93)は、音調も含め、ポーズ(休止)は義務的に実現されるものではないので、構造上の切れ目に比して二次的なものだとする。そして、ポーズは文末、従属句、挿入句、接続詞等、提示語句、並列語句のあとで多く現れることを指摘している。なお、大石は、「エー」、「アー」などを「間投声」と呼び、独立の語とは認めていない。

### 1.2 英語の休止

ブルームフィールド(Bloomfield 1933:92)は英語の音素体系の記述において休止(pause)に言及し、「一次的記号(分節音素の記号——引用者)の間に置かれて、休止はしばしば上昇音調によって先行され、文の継続を約束する」と述べている。また、彼は、「句の構成要素は自由形式であるから、話し手はそれらを休止によって分離することができる。休止は大概非弁別的である。それらは主として構成要素が長い句である場合に起こる。英語ではそれらは通常休止音調(pause-pitch)によって先行される」とも述べている(Bloomfield 1933:185)。また、このような休止に加えて、話し手が躊躇する時に用いる形式(ahのように書かれる)を彼は躊躇形式(hesitation-forms)と呼んだ(Bloomfield 1933:186)。Maclay and Osgood(1959:21)は、このような躊躇形式を filled-pause(有音休止)と呼んでいる。

## 2 アイヌ語の有音休止

アイヌ語の有音休止について特に記述したものは管見の及ぶ限りではないようなので、詳細は今後の課題であるが、少なくとも筆者が調査し得た千歳方言に関しては、上で述べた日本語の「えーと」、「あー」、英語の ah のような、一定の形をした有音休止を表す形式はないようである<sup>(2)</sup>。しかしながら、既に述べたように、少なくとも物語のテキストにおいては、語の末尾部分の反復がその機能を果たす<sup>(3)</sup>。もっとも、一般に、子音で終わる語では起こらず、起こる語類も比較的限られる等、日本語の反復による有音休止と事情が異なる点も存在する。以下では、音声・音韻、形態・統語の諸側面において、この反復による有音休止がアイヌ語の分析にどのような示唆を与えるのかを述べる。





- (10) asur a-nu kor, oː menoko a-korar pe ne kusu  
 噂 INDEF. TR. SUBJ - 聞く と 女 INDEF. TR. SUBJ - やる もの だ から  
 「噂を聞くと、娘を嫁に私がやったものだから」
- (11) sekor itak-an kor, oː a-huraye  
 と 言う - INDEF. INTR. SUBJ と INDEF. TR. SUBJ - 洗う  
 「と私が言うと、私は洗った」
- (12) a-yaykoranke sekor, oː huci itak kor  
 INDEF. TR. SUBJ - こぼすと 祖母が 言う ながら  
 「私が（涙を）こぼすと祖母が言いながら」
- (13) a-nukannukar, aː poro siri a-nukar  
 INDEF. TR. SUBJ - 世話する 大きい有様 INDEF. TR. SUBJ - 見る  
 kane poro matkaci ne wa  
 ほど 大きい 娘 だ て  
 「私は世話をした。大きくなるのをみているうちに大きくなった娘であって」
- (14) kotanpa un hacir, iː ruwe ne kusu  
 村の上手 へ 落ちる こと だ の で  
 「村の上手へ落ちたので」

このような事例をどのように解釈すべきだろうか。同じく子音であっても、/n/は音声学的に持続可能な子音であるため、反復の可能性はあると思われるが、/r/は、アイヌ語では、理論的には音声学に持続可能な震え音として実現されることもあるとはいえ、通常は弾き音（ただし、アイヌ語では直後に/r/の直前の母音に類似した音色の母音が余剰的特徴として現れるのが一般的）であり、普通は持続性を持たない子音と解釈されると思われる。勿論、大量の資料の検討が今後も必要であろうが、/n/を除いて他の子音ではこれまでのところ全く起こらない有音休止と見られる反復が、母音の反復という形ではあるけれども、/r/に関してみられるのは非常に目立つ現象と言わなければならない。この点に関して、まだ確実なことが言える段階ではないが、極端な可能性としては、話者が/r/の後の母音を単語の形の一部（すなわち音素）とみなしているということが考えられる。すなわち、子音ではなく、音韻論的に母音で終わる単語であるので、他の子音では通常起こらない反復による有音休止を許す、と考えるのである。もう一つの可能性としては、この反復現象は、音素のレベルで起こるのではなく、音声のレベルで起こる、と考えるというものである<sup>(4)</sup>。すなわち、アイヌ語の音節末の/r/は、震え音もしくは弾き音として、音声的に純粋に子音的に発

音されることもあるが、前述のごとく多くの場合、後ろに非弁別的な余剰的な母音を伴う。音韻論的にはあくまでも/r/ (すなわち子音) で終わっているが、反復による有音休止は音素レベルでなく、音声レベルで起こるので、この非弁別的な/r/の後ろの母音をコピーするのだ、と考えるというものである。しかし、どちらの解釈を取るにせよ、他の事例では、CVという反復パターンが許されるのに、なぜ/r/の場合にはVの反復の例のみで、CV型である、rVの反復の例が一例もないのか、という疑問も問題として残されている。今後の検討課題である<sup>(5)</sup>。

## 2.2 文法的特徴

反復による有音休止が現れる語類には明らかな偏りがみられる。接続助詞の後に現れる例が最も多く、格助詞、後置副詞、副助詞の後で起こる例もあるが、少ない。また、副詞の後に起こる例は少数あるものの、名詞の後に起こる例は極めて稀である。文末の動詞の後に起こる例も少数あるが、全体からみると極めて少ない。

### 1) 接続助詞の後

- (15) a-hokuhu                      soyne hine, ne:      matnepo-ho  
 INDEF. TR. SUBJ - 夫   出る   て                      娘 - POSS  
 kokow-ehe ekari              arpa hine, ne:      oputuye  
 婿 - POSS   向かって   行く   て                      押す  
 「私の夫が出て行って、娘と婿のほうに行って押した」

### 2) 格助詞の後

- (16) sine an to ta, ta:      tani      hene      toni      hene...  
 ある日      に              こちら      でも      あちら      でも  
 「ある日、あっちでもこっちでも・・・」

### 3) 後置副詞の後

- (17) cise okari, ri:      a-petpa    wa n:  
 家   廻りに              INDEF. TR. SUBJ - 細く切る      て  
 a-racitkere                                      p      ne      kusu  
 INDEF. TR. SUBJ - 掛ける      物      だ      から  
 「家の廻りに細く切って下げたものだから」

## 4) 副助詞の後

(18) tane anakne, neː menoko sirpo uwosmare  
 今 は 女 姿 集める  
 「もう一人前の女に成長した」

(19) kotan tane poro serke pakno ka, kaː supuya sak  
 村 もう 大 部分 まで も 煙 ない  
 「村はもう大部分まで煙が立っていない」

## 5) 副詞の後

(20) isimne, neː soy peka iki-an kor  
 翌日 外 を する - INDEF. INTR. SUBJ と  
 「翌日外で仕事をしていると」

## 6) 名詞（主語）の後

(21) na apkas easkay okkaypo utar, aː tasiro ka anpa  
 まだ 歩く できる 若者 達 山刀 も 持つ  
 「まだ歩ける若者達が山刀を持つ」

## 7) 名詞（目的語）の後

(22) pon matkaci, iː pon teynesi, a-sinasina  
 小 娘 小 赤ん坊 INDEF. TR. SUBJ - 縛る  
 「娘が、赤ん坊が縛られていた」

(23) puri pirka okkaypo, oː a-etun hine  
 行儀 良い 若者 INDEF. TR. SUBJ - 借りる て  
 「行いの良い若者を私はもらって」

8) 名詞 (所有者) の後

- (24) a-matnepoho, o: kotan-u kemus  
INDEF. TR. SUBJ - 娘 - POSS 村 - POSS 飢饉になる  
「私の娘の村が飢饉になる」

9) 動詞の後

- (25) rupne yuk kamuy a-ronnu, nu nep a-e rusuy...  
大 鹿 熊 INDEF. TR. SUBJ - 殺す 何 INDEF. TR. SUBJ - 食べる たい  
「大きな鹿、熊を私は取った。何も私達は食べたい・・・」

例が少ないものについては今後の課題として、これらのうち、例が比較的多い接続助詞についてさらに言えば、最も出現頻度の高いものは wa (489例) で、以下 kor (191例)、kusu (190例)、hine (119例)、akusu (63例) という順番であるが、これらのうち、反復による有音休止の出現頻度が最も高いものは hine の25%であり、次は akusu の22%である。これに対し、kusu は11%、kor は8%、wa は7%と、どちらかと言えば低率である。勿論、これだけからは何とも言えないが、休止が構造の切れ目と相関関係を有する確率が高いとすれば、kusu、kor、waよりも、hine、akusuの方が、後続の要素との意味的、統語的な結びつきが弱い可能性がある。また、副助詞の中では、anakne の有音休止の出現頻度が、37例中7例 (17%) と比較的頻度数の高い点が目を引く。このことは、anakne が日本語の「は」と類似した「主題」を表す提題助詞であり、この助詞の付いた要素は後続の節に属さない要素 (Sato 1997: 153) と考えられることと矛盾しない。

3 まとめと今後の課題

以上の考察の結果、以下のことが明らかとなった。

i) アイヌ語の反復による有音休止は原則として n 又は母音で終わる語に限られる。ただし、/r/で終わると考えられる語はこの限りではなく、/r/の後に余剰的に現れる、/r/の直前の母音、またはそれに極めて類似した母音が反復される。このことは、アイヌ語において、/r/が他の子音とは異なる性質を有する可能性を示唆し、特に、/r/の後に音韻論的に母音があるのかないのかという問題に関して重要な意味を持つと思われる。なお、この場合、反復による有音休止は、音声的現象であると同時に、音素交替 (注5参照) によっても規制されているとみられ、両面の性格を有すると考えられる。

ii) 有音休止は接続助詞に多く現れ、統語的な節の境界と相関関係を有することを示唆する。こ



のことは提題助詞の後で有音休止の出現する頻度が高いことによっても支持される。

iii) 同じく接続助詞でも、有音休止の出現頻度に差があり、有音休止が後続要素との統語的な結び付きを計る客観的な尺度になる可能性のあることが明らかとなった。今後、調査範囲を広げて、接続助詞全体を網羅する調査を行う必要がある。

iv) アイヌ語の有音休止は日本語の有音休止に比して文末に現れにくいようにみえるが、実際はどうか、日本語、アイヌ語両方の調査をさらに進める必要がある。

なお、ここでは扱わなかった例外的な事例についても、さらに多くのデータを集積して、本当に例外的な事例なのかどうかを確認したいと考えている。

#### 注

- (1) 分析に用いた千歳方言のテキストは白沢ナベ氏 (1905 - 1993) によるものである。お名前を記し、深く感謝の意を表したい。ここでは合計約1万語からなる三つの物語テキストから例を集めた。なお、このような反復による有音休止は、これまでのところ白沢氏にしかみられず、白沢氏の個人的な特徴かどうかは、なお検討を要する。
- (2) もっとも、例は少ないが (比較的确实な例は全体で15例)、反復によらない有音休止として、n (通例長く引き延ばされる。これをn:で表す) が用いられる場合もある (以下の例を参照)。

a-petpa                                      wa n: a-racitkere                                      p      ne      kusu  
 INDEF. TR. SUBJ - 細く切る      て      INDEF. TR. SUBJ - 掛ける      もの      である      から  
 「私が細く切って掛けるものだから」

このような n による有音休止は、n で終わる語の反復による有音休止や、oro wa un 「それから」の un に該当する可能性のある n との判別が困難であるなどの問題を引き起こす。また、もし反復によらない n という有音休止がアイヌ語で習慣的に用いられることが明らかとなった場合、反復による有音休止との機能的な区別があるのかも問題となるだろう。今後の課題である。

- (3) 物語テキストに比べて、会話資料そのものが極めて少ないので、物語テキスト以外でも反復による有音休止が用いられるのかどうか、問題となるところである。これまでのところ、例は少ないが、白沢さんは、物語テキストのみならず、日常会話でも反復による有音休止を用いている。以下の例は北海道ウタリ協会所蔵のビデオテープ (小田田氏とのアイヌ語による会話を収録したもの) に現れた例である。ただし、この3例のみであり、日常会話でも頻繁に用いられたかどうかはなお検討を要するかもしれない。さらなる会話資料の出現を待ちたい。

pet ot ta munin ayne, ne: amam a-huraye                                      wakka neno  
 川      中      で      腐る      あげく      米      INDEF. TR. SUBJ - 洗う      水      みたいに  
 「川の中で腐ったあげく、米のとぎ汁のように」

wakka ku      ka a: horse wakka ku      na  
 水      飲む      も      腐る      水      飲む      よ  
 「水を飲んでも腐った水を飲むよ」

pis ta sekor an pe anakne ne: appenay sekor  
 浜      で      と      ある      もの      は      アッペナイと  
 「浜でと言ったのは、アッペナイと」

- (4) 反復による有音休止の音調は、直前の語の末尾音節の高さをそのまま継承する人が多いようである。このことは、非弁別的な音声の特徴も含めてそのままコピーすることを示唆しており、この有音休止が (音素ではなく)、いわば表層の音声表示に基づく現象であることを支持するものである。また、接続助詞 wa は鼻音の後で ma [ma] に交替するが、例は少ないものの (付録参照)、その後さらに有音休止として ma を伴う場合がある。このことも、反復による有音休止が、先行の語の基底形ではなく、音声表示に基づいて行われていることを示唆するものと言える。ただし、注5) で述べるように、これに反する現象もあり、問題は単純ではない。

- (5) アイヌ語の形態音韻規則によれば、r の後に r が連続する場合、最初の r は n と交替することが多い。従って、/r/ (発音上は[r]+先行母音 (に類似した母音)、となることが多い) の後に rV という有音休止が起こらない理由は、あるいは rV が後続した場合に r が n と交替することを防ぐためとも考えられる。n に交替してしまうと、「反復」という特性が失われてしまうからである。だとすれば、rV の反復が起こらないのは、まさに直前の語が/r/で終わっていることを示すものとも解釈できる。このことは注4) で述べた、有音休止が音声表示レベルの問題であるという解釈と矛盾する。今後のさらなる検討課題である。また、明らかに音韻論的に /rV/ で終わる語形の後では rV が反復される (例: sinotcakire 「歌わせる」の後で re<sup>h</sup> が現れる。(17) の okari も参照) 例があることは、/r/ と /rV/ とで反復の型に差 (/r/ は rV の反復を許さない) があることを示すものと考えられる。なお、査読者のお一人から、/r/ の後にあいまいな母音が起こる場合の反復による有音休止の有無についてご指摘があったが、そのような事例がこれまでのところ見当たらなかったもので、本稿では触れなかったことを付言する。もっとも、全体の用例が少ないため、もちろん、さらなる確認作業が必要であり、もしも、あいまい母音であることが明らかな場合の有音休止の例が皆無だとすれば、それは、なぜなのか、問題となるところである。仮にそうだとすれば、このことに関する限り、反復による有音休止が、音韻的な形でなく、音声的な形に基づくものである (すなわち、/r/ が直後にその直前の母音を伴う異音として起こる場合にのみ起こる) ことを支持する現象となるかもしれないが、今後の検討課題としたい。いずれにしても、問題点を的確に把握した、重要なご指摘であり、この査読者の方に深く敬意を表す。

#### 略号

INDEF	Indefinite
INTR	Intransitive
OBJ	Objective
POSS	Possessive
SUBJ	Subjective
TR	Transitive

#### 参考文献

- 亀井孝、河野六郎、千野栄一 (編). 1996. 『言語学大辞典第6巻術語編』. 東京:三省堂.  
 川上泰. 1961. 「言葉の切れ目と音調」. 『國學院雑誌』62の5. 67-75.  
 国語学会 (編). 1980. 『国語学大辞典』. 東京:東京堂.  
 大石初太郎. 1968. 「ポーズ序論」. 『専修国文』4. 85-106.  
 田村すず子. 1988. 「アイヌ語」. 亀井孝、河野六郎、千野栄一 (編). 『言語学大辞典第1巻世界言語編』. 東京:三省堂. 6-94.  
 Bloomfield, L. 1933. *Language*. New York: Henry Holt & Co.  
 Maclay, H. and C. E. Osgood. 1959. Hesitation Phenomena in Spontaneous English Speech. *Word* 15. 19-44.  
 Sato, T. 1997. Possessive Expressions in Ainu. In T. Hayashi and P. Bhaskararao (eds.), *Studies in Possessive Expressions*, Tokyo: Tokyo University of Foreign Studies. 143-160.

付: 有音休止を伴う主な語類と用例数

#### 接続助詞

akusu	有音休止は su (13例) か u (1例)
awa	有音休止は wa (3例)
ayne	有音休止は ne (12例)
hike	有音休止は ke (1例) または e (2例)
hine	有音休止は ne (28例) または e (2例)
kor	有音休止は o (15例)
korka	有音休止は ka (6例)
kusu	有音休止は su (21例) または u (1例)
ma	有音休止は ma (2例) または a (2例)
no	有音休止は no (3例) または o (1例)
wa	有音休止は wa (21例) または a (15例)
yakka	有音休止は ka (1例) または a (1例)

yakne 有音休止は ne (2例)  
yakun 有音休止は n (3例)

格助詞

pakno 有音休止は o (1例)  
ta 有音休止は ta (3例) または a (1例)  
un 有音休止は n (3例)  
wa 有音休止は wa (6例)  
wano 有音休止は no (6例)

後置副詞

akkari 有音休止は i (1例)  
ani 有音休止は i (1例)  
okari 有音休止は ri (1例)

副助詞

anakne 有音休止は ne (7例)  
easir 有音休止は e (iではなく。要検討。)(1例)  
hene 有音休止は ne (1例)  
ka 有音休止は ka (4例) または a (2例)

## The Pausal Repetition in the Chitose Dialect of Ainu

SATO Tomomi

### Summary :

The Chitose dialect of Ainu has a special way to mark filled-pause by repeating the last CV or V of the preceding word. I mainly point out two problems: first, although this repetition usually occurs after words ending with a vowel, it also occurs after words assumed to end with /r/ (usually realized as [rV]), in which case the repetition is simply [V], but never [rV].

If we assume that the repetition is formed according to phonetic representation, we cannot explain why CV does not seem to be permitted in this case. On the other hand, if we would like to account for it by assuming that it works on a kind of deeper phonological level, it seems impossible to explain why in most other cases non-distinctive phonetic features, including pitch, must also be exactly copied. This fact suggests that it is not necessarily easy to decide on which level a rule works and that the Ainu /r/ represents a typically problematical case with regard to this problem of level distinction. Secondly, I point out that the frequency of occurrence of such pausal repetition, especially after a conjunctive particle, might be closely interrelated to the degree of syntactic relatedness of the clause to the following clause.

Key Words : filled-pause, existence and non-existence of vowels after/r/, syntactic relatedness between clauses